

PICK UP MOVIE



© 2020 LOTTE ENTERTAINMENT All Rights Reserved.

82年生まれ、 キム・ジヨン

〔2019年／韓国／118分〕 監督：キム・ドヨン 出演：チョン・ユミ、コン・ユ、キム・ミギョン
原作：「82年生まれ、キム・ジヨン」チョ・ナムジュ著／斎藤真理子訳（筑摩書房刊）

“大丈夫、あなたは一人じゃない。”

共感と絶望から希望が生まれた——
ベストセラー小説、待望の映画化



〔あらすじ〕結婚・出産を機に仕事を辞め、育児と家事に追われるジヨン。常に誰かの母であり妻である彼女は、時に閉じ込められているような感覚に陥ることがあった。そんな彼女を夫のデヒョンは心配するが、本人は「ちょっと疲れているだけ」と深刻には受け止めない。しかしデヒョンの悩みは深刻だった。妻は、最近まるで他人が乗り移ったような言動をとるのだ。ある日

は夫の実家で自身の母親になり文句を言う。「正月くらいジヨンを私の元に帰してくださいよ」。ある日はすでに亡くなっている夫と共通の友人になり、夫にアドバイスをする。「体が楽になっても気持ち焦る時期よ。お疲れ様って言ってあげて」。ある日は祖母になり母親に語りかける。「ジヨンは大丈夫。お前が強い娘に育てただろう」——その時の記憶はすっぱりと抜け落ちている妻に、デヒョンは傷つけるのが怖くて真実を告げられず、ひとり精神科医に相談に行くが……。

〔上映日程〕1/9~22（休映：1/14、18）

◎鑑賞料金：特別興行作品につき、年間パスポート（ゴールド）は利用できません。ゴールド会員の方は、一般¥1,000にてご案内させていただきます。

【トークイベント】3つの世代の「私」の物語

1/10 日

作品公開にあたり「それぞれの時代の中で、自分らしく生きるということ」をテーマに、3つの世代を代表するみなさまにご登壇いただきます。

（映画）13:40-15:38（トーク）15:40-16:25

（登壇者）田村志津枝さん、荒川玲子さん、伊藤茶色さん

誰の犠牲もならず、 自分の人生を生きよう

歳を重ねてきたいま、時折、この日本で人生の大半を過ごしたことへの悔いが、私の胸をよぎる。男社会の壁を打ち破れないこの国。ちなみに2019年の「ジェンダー・ギャップ指数」が、日本は153ヵ国中121位。つまり、さまざまな分野で決定権を握るポストにいる女性の数が圧倒的に少ないのだ。

さて、ではお隣の韓国では、女性はどうに生きているか。この映画の原作は、韓国ではフェミニズム小説とうたわれつつ100万部をこえる大ベストセラーになったという。

主人公キム・ジヨンは、出産を機に会社を辞め育児にいそむうち、精神的に追い詰められていく。夫にも本人にもなぜかは分からぬまま、彼女の日々の生活のようす、ふと心に浮かぶ思い出などがつづられていく。誰にも覚えがある日常の微笑ましい出来事、家族や友人への懐かしい思い、あるいは不快な体験など。するとしだいにその陰に潜むものが見えてくる。女性であるがゆえに受ける蔑視や軽視が、この世には満ち満ちている。その場は仕方なくやり過ごしても、負わされた小さい傷は心の奥底に澱のようにたまっていく。

だがこの作品には、女性側からの差別の告発にはとどまらない大きな視野が持ち込まれている。映画ならではの卓抜な手法で、祖母・母・娘と三代にわたって、家父長制や性差別のなかで我慢してきた思いを、はっきり言語化しているのだ。強い娘を育てよう、誰の犠牲にもならず自分の人生を生きよう、と。だからこそキム・ジヨンの夫をはじめ父親や弟ら、周囲の男性たちが少しずつ変化していく姿を素直に喜べる。そして、彼らの悩みにも耳を傾けようという余裕さえ生まれてくる気がする。

tamura shizue
田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオシェンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。